小説、ロマンス風もの、歴史小説（柳田泉の分類による。『福地桜痴』吉川弘文館）のうち著者が対象にしたのは諷刺小説である。これらの小説が二流以下のものであるとしながらも、世相を皮肉り、華族、紳商、政治家を諷刺せざるをえなかった作者の内奥を察し、底なしのニヒリズムをみたり、変節漢のレッテルに対して、つきない同情を示しているところに著者の一貫性を窺うことができる。

最後に雪嶺の項に移る。桜痴と相関させながら雪嶺という巨人を眺めているところに注目したい。巨人を眺望するには、いささか紙数に制限がありすぎたようであるが、『哲学涓滴』や『宇宙』、『我観小景』などをひいて、手際よくまとめている。「日本人」に拠ったという理由だけで、たんに右翼論壇の雄とみる雪嶺観に反対している。理由は常人の想像を絶するほどに該博な知識と壮大な哲学大系の所有者であったからで、こういう人間がファナティシズムにとらわれることは決してないというのである。筆者も同感するところである。私見をはさめば端的に『真善美日本人』をみてもあきらかで、個性の尊厳の優先を説いているところに傍証されている。一例を挙げれば軍備拡張は富財の多寡との正比にかかわっているという論述のなかにも明白である。これは直截的にファナティシズムにつながらない。『日本風景論』の志賀重昂にもいえることで、卑俗な国粋主義者とは区別されなければなるまい。

以上きわめて粗率な感想とはなった。もとより自慢にならぬが、まさしく尋章摘句というところである。非礼を詫びたい。著者があえて一様に、損をした人物をとりあげ、不幸な時代の底辺を根源的に追尋しようとして、しかも構えることなく、刻意簡明に描いたことは、著者の資質をいかんなく表したものであり、まぎれもなく明治文学石摺考というにふさわしい。今後に期するものが大きいゆえんである。

（昭56・11　葦真文社　四六判　二八四頁　二八〇〇円）

山崎一穎著『森鷗外・歴史小説研究』

小泉浩一郎

「鷗外の歴史小説の材源を渉猟し、材源と小説との比較検討を基本に据えた」とは、著者が自己の学部卒業論文を回顧する条りの一節（「跋」）であるが、それは本書における鷗外歴史小説の分析に当っての著者の実証を支える基本的姿勢であることは改めて言う迄もない。かえりみれば、今日における鷗外歴史小説研究が、最早それを経ずしては殆んど学問的な存在意義を主張し得ないとさえ言える、原拠と作品という方法意識を確立するに当り、最も大きな貢献をなしたものは、筑摩版鷗外全集第三巻（昭三七四）所収の尾形仂氏の注解と、引き続く同氏の数多の歴史小説論であった訳だが、著者の「材源と小説との比較検討」という方法意識の確立が、既に尾形氏の業績の公刊以前にあったことは、印

象批評の羅列がほぼ学界の大勢であった当時の研究水準の中にあって、著者の研究者としての資質が如何に刮目すべきものであったかを示して余りあるものと言えよう。

さて、目次で見る限り、本書は「歴史文学論序説」「鷗外文学に於ける歴史意識」「大正三年の鷗外」という三つの巨視的問題史的論考と、現代小説「灰燼」を含む「興津」「阿部一族」から「ぢいさんばあさん」に至る九つの作品論（便宜上「『堺事件』論争の位相もここに含む）とから成っている。これら二系列の論考は、巨視的、微視的な二つの視座から鷗外歴史小説の全体像を相補的に浮び上らせるために有機的に組み合わされている。その点、本書の内容が鷗外歴史小説への極めて体系的な追求の所産として結実していることを第一に特記しなければならない。直接に一項目を立てていない「最後の一句」以下の三作についても「『ぢいさんばあさん』考」に新たに付された〔追記〕において言及されているのも、著者の体系化への強い情熱の所在を裏付けている。ここに本書の第二の意義があろう。

従って著者の分析に対する読み手の様々な見解の相違がよしあるにしても、私たちは鷗外歴史小説の全体像やほぼ全域に亘る個々の作品についての一人の優れて個性的な研究者の摯実な見解を、本書において一望し得るという甚だ倖せな便宜を与えられたことになる。その意味で本書刊行の意味は大きい。

叙上の如き体系的把握への著者の情熱の必然的所産として、本書には鷗外歴史小説の道程に対する極めて明瞭な展望が示されていることに注目したい。即ちそれは「興津」「阿部」「佐橋」を一括りとしての歴史小説集『意地』（大二・六）の世界と、「大塩」「堺」における、いわば歴史の〈反逆の相〉（三好行雄氏）の剔出を主題とする世界、並びにそのような「歴史の自然」の呪縛からの離脱と、人間の道徳的高貴性の追求に焦点を絞った「安井夫人」「山椒大夫」以下のグループとである。そしてそれら三つの作品群との連関における現代小説「鎚一下」「天寵」「二人の友」、又史伝への過渡的作品としての「栗山大膳」、やや遅れての「都甲太兵衛」の位置づけに対する周到な目配りのあることも見逃してはなるまい。要するにかかる著者の巨視的展望は、今日における鷗外歴史小説の研究水準を踏まえての極めて妥当な視座として首肯し得るものである。

このような根本的視座から著者は原拠と作品との厳密な比較対照という方法に基づき、鷗外歴史小説における「歴史其儘」「歴史離れ」の方法原理に纏わる明暗の諸相を、微細かつ立体的に浮き彫りしようと努める。そこに齎される枚挙に遑のないほどの作品及び作品史にかかわる数多の創見の呈示は、到底限られた紙幅の中に尽せるものではない。

しかしながら僭越を顧みずに言えば、鷗外歴史小説研究の現段階は、最早素朴な原拠と作品との対比のうちから必然的に作者のモチーフや作品のテーマを抽き出し得るという、いわば〈客観〉信仰の段階にはない。洗い出された典拠と作品との対比を飽く迄も一つの前提としつつ、作品の構造を如何に読みとくかというのが今日の鷗外歴史小説研究に課された課題ではあるまいか。その意味で「『意地』論考」における「興津」初稿と再稿との「質的

差異」を踏まえての、「その差異の内実を鷗外はテーマの部分を変えずに、殉死の様相や興津家の先祖の事蹟を叙述する中に批判を象嵌させている。それによって側面からテーマを突き崩す方法を用いているのである」という再稿についての指摘や、「興津」「阿部」「佐橋」の主要登場人物の時代的世代的落差を踏まえた上での「歴史小説集『意地』の世界を貫く〈意地〉は、戦国武士としての同質の意地が、歴史の過渡期の状況の中で、価値観の相違や、個と組織との抵抗を生み、ともに終焉を迎えなければならない事を如実に示している」という総体的把握等々は、作品構造の読みときを踏まえた上で、鷗外の「歴史其儘」の方法原理の背後に潜む歴史感覚を正当に剔出したものとして注目に価しよう。おそらく「『意地』は、戦国から徳川幕藩体制への過渡期の状況が、明治から大正へのそれとオーバーラップされている」(「『阿部一族』の構造」)という把握に至る氏の創見の背後には、現代に生きる存在としての著者の強靱な歴史意識が潜んでいる、と言って良いだろう。

にも拘わらず、「『意地』論考」で「佐橋」について「家康の造型に成功しているが、甚五郎の心理まで分析解剖する所までいっていない」と夙に指摘がある如く、著者の鷗外における「歴史其儘」「歴史離れ」の方法原理に対する姿勢には、常に一定の留保が設定されていることを見逃せない。そのような留保は、やがて「堺事件」に対する「歴史の〈悪意〉」の捨象という厳しい批判的視角の呈示(「『堺事件』試論」)を媒介として、以後鷗外歴史小説の限界に対する根本的視座として大きく前面に立ち現われることになる(前記問題史的諸論考参照)。

そしてそれは又、既に周知の大岡昇平氏による「堺事件」批判に象徴される、今日の鷗外歴史小説への批判的潮流のうちに著者が確実に棹さし、もしくはそれを領導し来った先駆的な一個の研究主体であることをも指し示している、と言って良いだろう。

――無論、著者の鷗外批判が、〈体制イデオローグ〉鷗外像に結実する大岡論の如く短絡的でなく、「神の善意も悪意も見据えていた鷗外の強靱な精神」(「『灰燼』試論」)という把握に示されている如く、鷗外の認識と行為、いわば見たものと、表現しえたものとの二元的分裂への厳しい視線に基づくものであるとしても。(誤解を避けるために付言すれば、かかる著者の視座は、本書の序にその一端が開陳されている如く、飽く迄も著者が、近代日本の歴史小説の総体的展望に基づいて主体的に築いてきたものであって、軽薄な付和雷同の類とは質を異にするのである。)

にも拘わらず、例えば「安井夫人」についての、息軒を囲む状況と、その「心中を覗せないのは、それを形象化すれば当然維新史に抵触せざるをえないからである。(略)それを避けるために鷗外は息軒の転居や官の経歴と云う外面的記述に終始しているのである」(「大正三年の鷗外」)という把握に端的に示されている如き批判的視座は、果して作者のモチーフや作品のテーマを正確に領略しえているのだろうか、という疑問の生ずるのも亦、自然な筈である。抑も鷗外は「安井夫人」で〈維新史〉を書こうとしたのであるか。このような作品構造から遊離した作品批判が些かの疑問符をも付されることなく出現するのは、原拠と作品という

方法意識の自縄自縛性をも示しているのではあるまいか。ここに私は著者の原拠と作品との対比という方法意識のもつ、一つの陥穽の存在を見なければならないのである。

端的に言って、原拠と作品との対比によって帰納されるデータは、今日、飽く迄も作品の構造を読みとく一つの資料として相対化されるべきであり、逆に作品構造への読みが核となって既成の作品論、作家論を越える新しい展望がむしろ演繹的に生み出されなければならない段階に、今日の鷗外歴史小説研究は、さしかかっている筈である。その意味では原拠と作品との対比を通じての「歴史の〈悪意〉」の捨象という著者の鷗外歴史小説への批判的視座も、尚作品構造に照して慎重に再検討されるべき余地があるように私には思われる。

かかる私の視角から見れば、既に言及した「『意地』論考」は、本書中において最も安定した業績であり、比較的早期に書かれた「『魚玄機』論」は、尾形仂氏の論考の出現した現在もなお、原拠と作品との綿密な照合において高い学問水準を主張しうる。さらに「『ちいさんばあさん』考」の行き届いた鑑賞は、緻密な読み手としての著者の資質の半面を証して余りあり、「『山椒大夫』試論——情念の不毛を拓く——」におけるマーテルリンク「智恵と運命」との関連の指摘も新しい。独立した唯一の現代小説論である「『灰燼』試論」もこの作品の研究史において高い位置を占め得るもので、私も自己の「灰燼」考究において、決定的な一つのヒントを与えられた点のあることを付記しておきたい。

反面、筆者として気に懸ったものに「鷗外文学に於ける歴史意識」中の「抽斎」についての次の叙述がある。

> 津軽と南部の軋轢は歴史的事実である。北海防衛策を幕府に進言した平山行蔵の弟子で、文政五年八月二十九日に死罪になった下斗米惣蔵こと相馬大作の事を知らなかった筈はないと思うが、鷗外は一行だに触れていない。（傍点筆者）

即ち「抽斎」その二十五に「抽斎の相続したと同じ年同じ月（文政五年八月——筆者注）の二十九日に、相馬大作が江戸小塚原で刑せられた」とあり、以下三段には、相馬大作の事蹟、及び津軽、南部の関係についての内藤耻叟、外崎覚の論争の紹介があるからである。

筆者は本書を読み進めるに従い、改めて著者の諸論考を貫ぬく体系化への一貫した姿勢に圧倒され、息苦しささえ覚えたことをここに告白する。恐らく本書は、今後の鷗外歴史小説研究において、必ず対決せねばならぬ巨大な壁として、その存在意義を主張するであろう。

以上は、微力な筆者の、永年に亘る著者の友情と学恩に対する深い感謝の念と、ささやかな息抜きのための風穴を明けようとするモチーフに支えられた短評である。蕪雑かつ忌憚のない私見の開陳を御海容いただくことを願って、筆を措きたい。（一九八二・二・二八）

（昭56・10　桜楓社刊　A5判　二四二頁　三八〇〇円）